

2014年3月26日(水)

ゲスト 今村益三(朝日放送 元アナウンサー 常務取締役)

テーマ 放送史に残る名物番組の軌跡を追う

引き揚げ船の舞鶴港取材 “大報道合戦”

富士山頂から日本初のテレビ生中継

主な内容

◎日本の民間放送誕生の背景

◎大学の先生断り、朝日放送アナウンサーへ

◎ラジオ番組「歌の玉手箱」がヒット スポンサーのグリコとともに

◎新聞とラジオが大報道合戦 舞鶴港で引き揚げ船取材

◎1期生のアナウンサーは大阪弁の抜けないフレッシュマンばかり

◎富士山から日本初のテレビ生中継 朝日放送から大阪テレビへ移る

◎中国の古典・四書五経をフランス語で 今でも毎日8時間の勉強

司会 本日は改めて、もうかなり今村節が炸裂しておりますが、元朝日放送、元大阪テレビというよりも、関西の民放アナウンサーの草分けの一人でいらっしゃる、今村益三さんをお迎えいたしました。今村さんのお名前を、私は「えきぞう」さんなのかとずっと思っていました、ある文献によりますと「ますぞう」とも書いてあります。ご本人に伺いますが「えきぞう」でよろしいんですか。

今村氏 そうそう。ニックネームはね、朝日放送の時は「まっさん」って呼ばれていた。学生時代から「まっさん」って言って。何でもいから呼んでくれたらいいやと。

司会 お迎えいたしました。実は私、関西テレビの国際関係の仕事をしておりましてときに、その立場の人間は全て日米協会、それから日仏協会、日伊協会とか日独とか全部出なくちゃいけない仕事でありまして、そのときに、今村さんと初めてお目にかかりましたが、日仏協会のあの頃は理事をしていらしたのですか。

今村氏 何をしていたのか。いろいろ世話係。

—— 世話係をしておられましたか。流暢な、フランス語じゃなくて、関西弁でそこらじゅうを仕切っておられましたので、この方はどんな方かなという風に思っておりました。それ以外の会でも、何度かお目にかかる機会があり、なるほどこういう前歴をお持ちの方なんだなあというのが、段々と分かってきました。やっぱり様々な話題をお持ちですし、お話することが大変お上手でいらっしゃいましたので、アナウンサーの草分というのも、<sup>むづ</sup>宜なるかなと思った次第でございます。民放アナウンサーの草分けですので、様々な場面に登場し、様々な出来事に遭遇しておられます。今村さんのお話をこういうところでお伺いして、形に残せるというのは非常に光栄なことだと思っています。いろいろと大きな出来事が3つ、4つばかりありますので、ゆっくりとお話を伺って、それから大いに語って頂こうと思います。それでは、1951（昭和26）年にABCにお入りになりました。もちろんラジオ時代で尚且つ夜明け時代ですよ。

<日本の民間放送誕生の背景>

今村氏 会社ができる前。会社ができたというか、放送が出る前。

毎日放送のほうが早かったんです。電波が出るのはちょっと遅れて、うち（ABC）が出たんですけれども、毎日放送、その後ろにいる毎日新聞がもうどんなに素晴らしい会社かというのは、その頃に頭に植え付けられた。偶然、OTV（大阪テレビ）へ行くと、その毎日新聞の偉い人、高橋信三さんとか、坂田勝郎さんとかにお目にかかる機会もあるし、それから一緒に仕事する人もいるし、あのとき、OTVというのは朝日放送と毎日放送、朝日新聞と毎日新聞、非常に珍しい組み合わせ（で設立）。敵同士ですよ。

—— 今では考えられないという。

今村氏 だから今でもやっぱりあの辺の時代に生きた人はね、親近感がもの凄くあります。同じ会社で、同じ釜の飯を食ったというかね。また、向こうから出してきた人が、ええ人ばかり。その中でもええ人が来た。朝日放送はねカスばかり出したんです。それで本当に選り抜きの優秀な人格、識見の素晴らしい人と、私も朝日放送で役に立たんから、放り出せというので、放り出されてきたら、毎日から来た人が素晴らしい人ばかりだった。その中の一人が、繁村純孝さんであったり、斎藤守慶さんであったり、それから時々お目にかかる前田治郎さんっていう話が出てましたけれども、前田さんと一緒に外国出張するでしょ、そうすると高橋さんとか坂田さんなんか来てはるわけですよ。夜になると一緒にご飯食べるでしょ。そうすると

OFF の話がでるわけですよ。この方々は人間的にも素晴らしいし、それから、教養もあるし、第一ね、優しい。だから新聞社がラジオを、あとはテレビを経営するときの姿勢が毎日と朝日とでは全然違うんですよ。

—— のっけからなんか毎日と朝日の比較論になっていますね。この前打ち合わせをさせて頂きましたが、盛んに、毎日放送を褒めておられましたけども、今ね皆さんお気づきにならなかったかもしれないですけど、アナウンサーというのは鼻濁音が必要なんですね。朝日放送が「あさひほうそうんが」という風におっしゃった。やっぱりまだアナウンサーとして十分残しておられるものがあるんじゃないかなという感じが致します。ABCにご入社になったときは、もちろん厳しい試験を受けてアナウンサーになったわけですよ。

今村氏 それがね、取り損ないですねん。

—— その辺りからお話を。取り損ないのあたりから。

今村氏 取り損ない。そのもう一つ前。民放は誰のお陰で日本に誕生したかという話から行きましょう。

—— お願いします。

今村氏 それはね皆さんご存知、若い人は知りませんよ、マッカーサー元帥。この人が民放を作ってくれた。あんまり皆この頃言いませんけどね、私にとって、マッカーサーという人はいろいろな意味で非常に影響力の大きい人でね、私の学生時代は占領中ですからね、GHQがあって、あの人が一番偉い人。その人がいろいろなことを言うんですね。それがすぐ日本の法律になります。面白いですね。わーっと言うと日本の国会がすぐ、立法にするんですね。そうすると法律になる。あの人のひと言はすなわち日本国の金科玉条になるんですね。そういう時代の学生ですから、まあ見ているわけです。最初に何を言ったか。あの人は、「日本は東洋のスイスになれ」と言ったんですねえ。まあそれは負けたから。二度と戦争起こしたらいかんと。アメリカの敵になるようなことをしたらいかん。原子力の兵器なんかをもちろん持つことは許さん。いろいろな厳しい条件を課して、日本はもう農業国家にしようかね。東洋のスイスになれって言ったんです。僕は、そうか日本はスイスになるのか。それで私、農学部へ行ったんです。

—— 面白いですね、それは。

今村氏 だから、あの人の言うことを信用しすぎたわけですよ。私は農学部へ入って、あの時分は皆お腹がすいていた時代です。餓死一步手前。みなさんもそうですけどね。なるほど、ええこと言うなど。お腹をすかしている栄養失調の日本人は、農家の人は別ですが、普通の町の人は皆腹ペコや。こんな顔してね。で、私は農学部へ行って、酪農をひとつ日本でやろうと。というのは、バター、ミルク、アイスクリーム、そんなもの日本はゼロだ。だからそういうものを今のこの飢えて、痩せこけている日本国民皆がたっぷり食べられたらいいなど。マッカーサーいいこと言うなあと。どこかに記録残っているはずですよ。「東洋のスイスになれ。」って言ったわけ。それで私は前の高等学校、古い高等学校ではね、医者になるつもりだった。普通の医者。

—— 普通の医者ね。

今村氏 なぜか。戦争中だから、私と同じ年の人は皆、何をしたか。支那、支那兵と言ってはいけない。中国兵の藁人形を作って、銃剣術、本当に剣をつけて、突き殺す稽古を毎日やるんです。配属将校が来て。僕は大阪商人の子どもだから、あんまり合わないんです。そんな支那兵前に置いて、本当に戦場ではやったらいいですけどね。生きた支那兵の捕虜を捕まえてブスーッと殺すのを。やらされたらいい。我々軍事教練では藁人形。それで「これは中国兵やから」中国なんて言いませんよ、支那兵。支那兵を殺せと言って。大阪商人の子だから、そんなのはあんまり合わない。そろばんを持っているほうがいいからね。それで、このまま、100年戦争って言いました、あの頃。だから死ぬまで戦争だから、兵隊に取られたら、人殺しばかりさせられるなどと思って、それなら軍医になろうと。軍医になると人殺しなくていいわけですね。野戦病院で傷ついた兵隊さんを治してたらいいんですから。それで医学部へ行こうと。医学部へ行くためにはね、あの時分、昔の高等学校は英語のコースとドイツ語のコースとフランス語のコースとあって、それを甲乙丙といったんですね。理科の私は医者コースへ入りましたから、今の東大でいう、理三へいくコースですね。入ってドイツ語の勉強をして医者になろうと思って。支那兵殺すのはかなわないからね。殺さなくていいところは軍隊では軍医しかありませんからね。大学の医学部出ると、陸軍へ入ったら初めからもう少尉か中尉ですからね。軍医は。それはもう大隊なり中隊なりに配属されたら、鉄砲持たんでもよろしい。医者の道具だけ持っていたらいい。海軍へ入ると、まあどっちになるか分かりませんが、海軍に入ると、大きな軍艦、最低では駆逐艦ですね、巡洋艦とか戦艦なんかはもっと偉い人がいるんですが。駆逐艦だったら、もう少尉、中尉で軍医長ですねん。よく沈みますけどね。駆逐艦。乗ってたら戦争しなくてよろしい。ボンとやられて傷ついた人を治すわけね。それでずっとやってて、もうじき卒業。卒業したらあの時分

は昔の旧制の高等学校はどこかの学校へ入れます。まあ東大は難しいけれども、京都か大阪か名古屋か九州かだったら、旧制高校だったらまあ試験はあってもなくても一緒だけでも、とにかく入れてもらえるわけね。

—— 帝国大学ですね。

今村氏 帝国大学。だから旧制高校から旧帝大というのが昔のコースですからね。それで、もうどこでもいいから軍医になったらええわと思っっているんです。そしたら戦争負けまして。とたんにマッカーサーが来て、皇居の前のビルにね。デンといて。なんかひと言、ぱつと言うとね、それが法律になるんです。マッカーサーのひと言はね、天皇陛下のひと言より重いんですね。あの時分は。昭和 20、終戦の 22、3 年頃から本当に日本が主権を回復するのは 26 年かな。4、5 年の間はもうマッカーサーの天下や。そのマッカーサーがお見えになって、なにを<sup>のたま</sup>宣うたかという、さっき言ったように、「日本は東洋のスイスになれ」と。お前達、武装解除するから、スイスみたいな農業国になったらいい。彼のひと言は日本の全ての法律に優先しますからね、それがちゃんと立法化されるわけ。それで僕は農学部へ行って、腹ペコでこんな顔して痩せこけている日本人に、偉そうなこと言いますが、バターや牛乳やチョコレートとかチーズやら、いっぱい作って食べさせよう。そのためには農学部へいくしかしゃない。マッカーサーも言っているし、マッカーサーの言うことは日本の全ての法律になりますからね。軍医はもういらぬわけだから、戦争に負けたから。それで医学部へ行くコースを、あの時分はね理科の乙というのはね、旧制高校理科の乙というのは、医学部へ行くか、それいやなら、農学部しかありませんね。そこから文系の経済、法律なんかには行けない。もうピシッと決まっています。そのかわり旧制高校の理科は兵役ないんです。

理科のほうが競争率ももっと高い。なぜかという、兵隊に行かなくていいから。文科に入った連中は今でも、もの凄くコンプレックスあるんです。理科のやつはね、今でも旧制高校の同窓会を定期的にやっていますけどね、文系はあんまり来ない。なぜか。理系はエリートなんですね。エリートで戦争に行かなかった。文系は皆徴兵で兵隊に取られるでしょ。なんとなくコンプレックスは今でもあります。だから同窓会行っても理系ばかりだ。医者がいっぱいいるんですね。理科系には。文系でほとんどは裁判官とか弁護士とかになっているけれど、元がね、入学試験が優しい文系に入ったというコンプレックスが今でもあります。今はもう違いますよ。文系の東大のほうが威張っていますけどね。まあそんなことがあって、私はマッカーサーの言う通りやった。そしたらマッカーサーちょっと気を変えてね、朝鮮戦争始まったから、日本は東洋の兵器廠になれと。兵器廠というのは軍事工場ね。バツと変わるわけですよ。農学部も用事ないんですわ。百姓やったって、兵器作らないか

ら。だけどマッカーサーの命令は天下一だからね。日本はパッと方向転換して、米軍の下請けになったわけですね。まあ今でも下請けですけどね。それならもう百姓も辞めや。何をしたらいいかと思っていたら、マッカーサーはまた次の命令を出した。日本に民間放送を作れと言ったんです。昭和 25 年か 6 年です。日本人に民間放送といっても分かりませんね。NHK しかなかったわけですから。マッカーサーはアメリカ育ちだから、その頃、アメリカには、PBS(公共放送)というのはなくて、全部民放ですね。三大ネットワークです。全部民放だからマッカーサーはアメリカの民間放送を見て大きくなったからね、「日本に民間放送を作れ。NHK だけだと、また戦争する」そういう考え方、NHK に対する不信感があったんでしょ。マッカーサーは、それで初め「東洋のスイス」、「日本は兵器廠」。最後にええこと言って、それだけ言ったあと、彼はトルーマンか誰かにクビにされます。最後に残したメッセージが「日本に民放を作れ」だったんです。

#### <大学の先生断り、朝日放送アナウンサーへ>

それで僕は、朝日放送の入社試験を受けることになります。それが昭和 26 年の 5 月ぐらいかな、朝日新聞にこんな小ちゃい記事で、朝日新聞は、マッカーサーの命令によりとは書いてないですよ、民放を作ることになって朝日新聞も朝日放送という会社を作る。ついては、会社そのものはまだ何もないんです。まあせいぜい幹部が 2 人か 3 人。偉い人がね。朝日新聞から出向する。だから最初に採用するのはアナウンサーだということです。そんな記事が出たんです。私は失業みたいな状態で、あの時分、採用試験はどこにもない。京大の先生にどないしましょうかと言ったら、心配するなど。これからは、駅弁大学というのがあっちこちの街にできて、うちの教室にいたら、そのうち引く手あまただと。まだ大学院に残っておれというわけですね。本当に残った途端に来ましたわ。滋賀県に新規に出来る大学がね。それが昭和 35, 6 年かな。そしたらやっぱり先生が要るでしょ。既成のいい先生はどっからかプロフェッサーを引っ張って来るけれども、助手とか講師とかは採用しないといけない。それで京大の先生のところへ助手を一人推薦してくれと言って、先生がなんか失業しているやつが一人おるからお前行けと。もし行っていたら、僕は滋賀県立大学の教授だ。ところが大阪近辺ならいいけど、滋賀県の彦根へ行って先生になったらもう都会へ帰って来られない。大阪商人の子供で、田舎は経験がないから、先生に嫌だと言ったんです。「わしの推薦するところを断るんだったら、もう知らんから勝手にせい」と言って、先生から破門だ。どうしようかなと思っていたら、朝日新聞がこんな広告、記事ですけどね、サービスエリア(近畿地方中心)の地図も入れて朝日放送は民間放送を始める。アナウンサー募集。志願書を出せ。学部を問わないって書いてあった。ところがあの時分はねえ、大きな会社、商社であれ銀行であれ、卒業した学科は経

済、法律に限られていたわけです。農学部を出たって、採用試験を受ける資格がないんですね。だから、もうどこも行くところがなくて、どうしようかなと思って、その朝日新聞の記事を見ると、学部を問わない。

それを私のおふくろがどこからか見つけてきて、「こんなん出ている。受けてみたらええ」だけど私は、劇団の勉強したことないし、アナウンス学校なんて、あったかなかったか、知らないけれど行ったことないし、もうあかんわって言うてみたら、物は試しやから受けてみたらと言われて、受けたら通りましてん。なんで通ったか。それはその当時えらい、朝日放送の偉い人で原さんという人がおりまして、その人がともかく大阪で作る朝日新聞の放送局は全部素人でやるというのです。

——— じゃあ、ほかから誰も呼んでこないってことですか。

<ラジオ番組「歌の玉手箱」がヒット スポンサーのグリコとともに>

今村氏 毎日放送は、もちろん現地採用というか、採用もされているけれども、上の方はNHK・BKから呼んできた。だからもう開局の試験電波のときから、きれいなアナウンスでニュースを出すんですね。こっちは大阪弁丸出しのね、大阪やから大阪人採ろうという志はいいですよ。素人で変わった社風を出そう。だけど、アナウンスは出来ませんよ。偉い人は、それいけマッカーサーみたいなもんですからね、それいけーでそのままびゃあーと始まった。だけど二期生、二番目の採用から、もう二度とあんなもんは採らんってことになって。懲り懲りや。

——— 一期で懲りたわけですね。

今村氏 一期でもう懲り懲り。一期は何人かいましたわ。皆びゃーとアナウンス部から放り出されて、だから私もラジオを5年やって放り出され、もうテレビもちょっとやって放り出され、すぐほかの所へ行きましたけどね。

——— その放り出される前に、なんか楽しい番組をおやりになったそうですね。

今村氏 ああそれもね、何年やったかな、「歌の玉手箱」というのがあって。これもね、後足で砂かけて朝日放送を出たでしょ。そうすると残った偉い人はね、あの番組はなかったことにするって言うて。

——— なぜなんですか。

今村氏 古事記・日本書紀と一緒に、いらんことは全部削るわけ。

だから朝日放送の社史なんかには残っていませんわ。ところが「歌の玉手箱」には、グリコがスポンサーについて。

——— なんか面白い番組だったようですね。

今村氏 本当はどうか知らないけれど、とにかく江崎グリコがスポンサーについて、その番組をもの凄く大事にした。朝日放送は、「あいつがやってるんだったら、歴史から消せ」と言ってね、もう古事記・日本書紀と一緒に、朝日放送の記録にないんです。だから朝日放送の50年史見てもありませんわ。

——— 私ちゃんと資料を見つきましたが、その当時のグリコはあんまり、メジャーじゃないでしょ。

【注】「朝日放送の50年」Ⅲ資料集には次のような記述がある。

「1951年11月11日～1957年4月14日 日曜日 12時～12時50分放送」  
出演 今村益三 楠トシエ」1951（昭和26）年に放送された主なラジオ番組のトップ項目に記されている。

今村氏 だから、グリコは「歌の玉手箱」で全国版になったんです。そのときのグリコの社長は、江崎さんといって今の社長のおじいさん。江崎利一っていったかな。この人が引っ張って伸びていった。朝日放送のあの番組、あの司会者、あれはグリコの社風に合っていると。グリコは、あれいいから、グリコの番組にしようというわけですよ。グリコの社史を見ると、全ページ使って、写真から番組の紹介までいっぱい載っていますよ。

——— でもその「歌の玉手箱」は、その当時NHKの「のど自慢」がありましたが、「のど自慢」でもなく、「3つの鐘」でもなくて、どんな番組だったんですか。

今村氏 自分で持ってきた歌を歌ってはいけないという番組でした。それで玉手箱はどんなものかというと、縦が1メートル、横が1.5メートルぐらい、深さが1メートルぐらい。

——— 随分、大きい箱ですね。

今村氏 玉手箱はブリキの箱。それを開けると、歌詞がいっぱい入っています。民謡もあれば、童謡もあれば、歌謡曲もあるし、演歌もあるし、まあ、ごちゃ混ぜに入っている



て、出演者はそこから引くんです。

——— これは公開番組ですね。

今村氏 公開番組。例え演歌が上手だと思って来たけれども、引いてみたら童謡が出たとか。それを歌わないといけないんですよ。だから、上手じゃなくても、面白くやったらいいわけね。素人ばかりだから。それから NHK はカーン 1 つ。鐘が 2 つ 3 つでしょ。朝日放送に、音の効果（サウンドエフェクト）を担当する人で、もう早死にしましたが、面白い人がいて、私が考えると言って（こうなりました）、鐘 1 つの代わりは擬音ですが、牛の声。ふーって吹いたらモウーと言う。鐘 2 つに相当するのが、カラスの声。笛でぴゅーぴゅーって吹くと、カーカーと鳴きます。鐘 3 つはホトトギス。えーっとウグイス。あ、カッコウ。

——— カッコウですか。

今村氏 カッコウ、カッコウ、カッコウと 3 つ鳴きます。

司会 ほー、なるほど。

今村氏 それがまた、効果の出しようが上手なんです。審査員、専門家が、相談してあれはいかん、これはペケと言うとモーって鳴く。ちょっと上手だとカッコウ、カッコウ。いや違う。2 つ目はなんだったかな。モーの次はカラスかな。

——— モーがあって、カーがあって、カッコウ、カッコウ。

今村氏 声が面白いのと、それから必ず二人連れなんです。

——— あ、なるほど。二人で歌うんですか。

今村氏 そうそう。親子だったり、高校の友達だったり、小学校の友達もありましたね。そのコンビが面白いでしょ。じいちゃん、ばあちゃんが出てくると、耳が遠いからなかなか通じないんですね。それが面白いといって。とにかく、NHK ではやれないようなちょっと変わったことをやったんです。プロデューサーが偉かったんですが、評判が良くなって、グリコが喜んで。グリコっていうのは、昭和 22、3 年頃、ちっちゃな駄菓子屋でした。それがこの番組をやることによって、わっと近畿一円にね。

——— それは大阪だけですか。

今村氏 大阪だけ、初めはね。そしたらグリコは、もっと大きく、もう全国版にしよう。今は全国版というよりも世界中に行っていますけどね。あの時分、江崎利一さんは、なんとか日本全国の店にグリコを置いてもらおう。それにはこの番組を東京からも放送しないと、と朝日放送へ相談に来たんですね。東京の局はどこやと、TBSです。うちはラジオしかないから。TBS ラジオ。いいじゃないかと、話を進めたら、TBSはどう言ったかという、「何、田舎の放送局のアナウンサーがやってるって。そんなものは東京では流せない。東京でTBSが放送するんだったら、TBSのアナウンサーを使います」。今やっているアナウンサーは大阪だけ。そこでTBSと朝日放送と2本ずつ作ったら半分は東京制作。その両方を混ぜて全国放送。ということを押し付けてきた。その頃の大阪と東京の経済、文化、放送全ての力関係はどちらが上かという、大阪が上なんです。それを聞いた原清さんという偉い人が、「断れ。そんな自分のところのアナウンサーでないとネットさせないような奴と、ネットすることはない」と。あの時分はね大阪の局のほうが東京の局より偉かったの。今は考えられませんよ。原さんが「ああ、いらん、断れ」って。そしたらグリコがびっくりしたんです。なんで東京がアカンと言うのかって。あのアナウンサーを使ってこの番組は誕生して、2年間か3年間か面白く続いているのに、それを引っ込めろというのは無礼であると。すると間髪入れず、文化放送（JOQR）が、バツとやって来て、「うちでやります。ああもう今村さんで結構です。もう今の通りで結構です。スポンサーもグリコで結構です」って言いに来た。そしたら原さんは「それなら良かろう」ってビュッと変わった。そんなことは今の時代では考えられません。

——— 本当ですね。

今村氏 うん。力関係が全然違う。グリコは喜んで、バツと全国放送になったでしょ、それが出ると、田舎のお店でね、グリコを置いてくれます。放送ももちろん出るし、もう一つ面白いのは会場が要ります。全部公開録音だから。

——— ですねえ。

今村氏 全部、温泉や。それは私にとっては結構なことですね。大阪、近畿一円の温泉、行かないところはなし。毎週ですから。

——— 誰が温泉なんて言い出したんですか。

今村氏 グリコ。グリコが温泉でお客様集めて、グリコを配るんです。お風呂に入ってあのグリコ舐めたら、美味しいもんな。東京へ行ったときに、東京の小売業者にも文化放送の玉手箱っていうので、私が、その代わり一月のうち半分東京ですわ。2本東京、2本大阪ね。しょっちゅう出張するでしょ。アナウンサー少ないのに僕がひんぱんに東京行くから残った人は、泊まり、泊まり明け、日勤、泊まり、泊まり明け、日勤。僕は東京で遊んでいるわけでしょ。遊んでいないけれど。また足引っ張られるのね。だんだん居辛くなって、もう辞めてやろうと思って。

——— 改めて伺いますが、これは毎週一本の番組ですか。

今村氏 そう。日曜日のお昼。

——— 日曜日のお昼。

今村氏 だからNHKの「のど自慢」にぼーんとぶつけて、東京は知りませんが、大阪の人はNHKが嫌い。だけれど、民放は好き。民放の番組は素人くさくて、なんか頓珍漢なことをやって失敗ばかりなんですけど、そここのところがいいんですね。東京の局が作るのは、失敗なんかすると、アナウンサーがクビになるから、スキッと、きれいにまとまっている。こちらは隙だらけ。大阪の聴取者は、それがいいというわけですね。NHKの番組は鼻につく、宮田輝ってのはやらしいってね。結局、その聴取率は「玉手箱」のほうがずっと上なんです。東京も大阪も。NHKは半分ぐらいしかない。それで喜んだのがグリコ。でも全国放送したら、グリコの商品は、その時分ポッキーがないから、いわゆる、このハート型が全国津々浦のお菓子屋さんの店頭で並んで、それが売れたんです。グリコの社史を見ると、僕の写真は出ているわ、グリコの玉手箱のステージの写真は出ているわ、記事はいっぱいあるわで、朝日放送の社史じゃないかと思うぐらいの取り上げ方をしてくれているんですね。

——— 温泉地も喜びましたし、スポンサーさんグリコさん喜びましたね。それからこのABC、QR（文化放送）だけじゃなくてほかの地方局も行かれたんだそうですね。

今村氏 そりゃ温泉へ行くと、そこの地元の局が来ます。城崎へ行くと、あのへんの放送局。道後温泉へ行くと、例えば南海放送。いまでも民放あるでしょ、松山に。だからもう地方の放送局へ行くと、機材を全部借ります。マイクロフォンというと、

こんなに大きい機材でしたから。

ローカル局の技術の人も来てくれて、人集めなんかをする。自分の地元ですからね。道後温泉ですと、道後温泉の会館があって、あのへんの人がワッと来る。あの時分、ラジオ、民間放送ラジオの公開録音というのは、もの凄く珍しかった。

NHKは、そんなところまで来ません。東京でやっていますからね。そうするとローカルで人気があって、グリコはまたそこへウワッとお菓子を撒いて。それで江崎利一さんという、グリコの今の社長のおじいさんが公開録音の現場へ来るんです。それだけ、熱が入っているんですね。スポンサーの創始者が自分のところの番組の現場へ見に来るということは、今では、あんまりないです。そのときに必ず孫を連れて来ます。孫が玉手箱のファンで、現在のグリコの社長です。

—— ああ、はいはい。

今村氏 だからグリコの社長は子供の頃から玉手箱を見に来ていたんです、それがあの水防堤の倉庫に監禁された人なんです、彼に、きれいなお嬢さんが2人いて、いろいろなイベントに来られます。

向こうから、江崎ですというから、はあ、どこの江崎さんですかって聞いたら、お父さんはその監禁された人だった。こんな小さい頃に、私の番組のところへおじいちゃんと一緒に来られていたという話をすると、お嬢ちゃんはその話、聞いていないでしょ。だから、おじいちゃんの記憶もないかもしれませんね、お父さんが子供の頃に来て、そのときは利一さんも来られていた。だから、グリコをあげてサポートしていたということですね。

—— その次の話題に行かせてくださいね。  
舞鶴の大報道合戦っていうのがありました。

今村氏 あった、あった。

—— はい。昭和28年頃のことだそうです。

今村氏 入社して2、3年。3年目やったね。

—— 玉手箱よりちょっと前ですか。

<新聞とラジオが大報道合戦 舞鶴港で引き揚げ船取材>

今村氏 いやいや、玉手箱は始まったらすぐだから、昭和25年、26年。それから2年間ほ

どしたら、あの引き揚げ。引き揚げは前からあったんです。だけど全部米軍がやっていた。日本の手に移って、日本政府引き揚げやってよろしい、それで、米軍がバツと手を引いた。それがまだ占領中ですよ。引き揚げが2つあったんです。中京から、中京ってことは中国からの引き揚げ。それからソ連からですね。

「朝日放送の50年」年表によると、

1953（昭和28）年3月23日「中国からの引き揚げ再開第1陣  
興安丸と高砂丸が3968人を乗せて舞鶴に入港」とある。

ソ連からの引き上げ。出る港も違うし、スタイルが全然違うんです。ソ連から帰ってくる引き揚げ者は、船の上で「ダモイ」とか言って騒いでいるわけです。中国から帰ってくるのは、人民服。皆、ものも言いません。それをとにかくつかまえて、船が舞鶴へ入るちょっと前から放送始める。朝日新聞が大きなランチを借りてそこへちょろっと乗っけてもらうんです。

—— 今村さんはその中継のアナウンサーとして行かれた。

今村氏 そうそう。だから、いわゆる初めて日本政府が担当することになって最初の引き揚げ船でした。興安丸といってね、1万トン以上の大きな船。それに、最初はたぶん中国からの帰国。それが、舞鶴の湾頭をビュッと曲がっているところから放送が始まります。

—— そのランチに乗っかって。

今村氏 それに乗っかって、機材もいっぱいあるんです。そりゃ新聞社は、記者が乗ったらしまいですが、こっちは船の上から生中継だから、電波を出さないといけない。ところが、船は出てゆく、興安丸は近づく、機械は故障して動きません。

—— ええー。

今村氏 声を出しても届かない。

—— あらあら。

今村氏 放送は予告済みで、6時半ぐらいから生放送。1時間か2時間。舞鶴から生中継と書いてあるんですが、僕は機械に弱いんです。そしたら技術の人はクビがかかって

いますから、必死に直すんですよ。やっぱり天佑神助ですね、すると興安丸がヒューと舞鶴の博奕岬<sup>ぼくおみさき</sup>をクリッと回ったら見えるんです。それは、外海だから競争したらいけません。政府は、湾の中でなら、新聞各社は競争してよろしいというわけです。新聞各社は全部ランチを持っているわけで、その興安丸に向かって、一斉にワーッと寄って行くんです。そのときから、もう放送しないといけない。ところがその前に機械がプツと止まってしまった。これはえらいこっちゃなあと思っていたら、電波がパツと繋がった。そこから電波を飛ばして、舞鶴の山の上の方のところへ1段目。それから中国山地の2段目。それから堺の送信所。3段か4段の中継です。だから、放送といってもしゃべるのは私一人。技術の人は何人もテントを持って中国山地の山のとっぺんへ上がっているわけですよ。

—— 中継のために。

今村氏 中継のために。それ（電波）が繋がって、興安丸が見えましたって言った。それをね、あの時分はテープっていうのはね、ソニーとは言わなかった。東通工。紙のテープで、まだあの時分はね。やっとビニールのテープが出てきた頃です。それを誰か技術の人がね、僕の放送1時間か、1時間半ぐらいだったかな、全部ちゃんと同録してくれました。昭和23年か24年。貴重なテープをもらいました。割に落ちていてしゃべっています。なぜなら、故障したからなんです。向こうの技術の人木村久生さんは、後ほど、技師長になる人ですが、もう真っ青になってやっていました。

—— その間に落ち着いてしまったんですね。

今村氏 落ち着いた。だから、それは私の鎮静剤。パツと繋がってから興安丸が見えました。それからあとはもうダモイやなんや、ウエエエっとこんなですわ。

—— 「ダモイ」っていうのはどういう意味ですかね。

今村氏 帰国。ロシア語です。

—— 帰ったぞーっていう。

今村氏 平棧橋へ上陸して、それをずーと生中継して、また上陸するでしょ、そしたら改めてその人達に集まってもらって座談会。それも司会をすとかね。よく働きました。

—— でも、大報道合戦というからにはですね、新聞の人は「なんとかですかー」って聞いているわけですか。

今村氏 それがね、ランチを近づけて駆け上がるんです。

—— ああ、船に。

今村氏 船に。登ったって彼らは取材できますから。僕は登れない。こっちで放送しているから。どうするかというと、長い竹竿の先にマイクを付けて、ランチからシューッて上げて、「それつかまえてしゃべってくれ」というわけです。そうしたら帰ってきた人は嬉しいから、もうダモイダモイ言っているわけですね。こっちは下の方から、「どこにおられましたか」とかね、「抑留生活はどうでした」とか聞くでしょ。そんな対話が全部放送されます。

やがて興安丸が着いたら皆上がるでしょ。上がったら今度はその人達を呼んできて座談会。これをずーっと生放送。最初の間はその技師の人が「あかん。繋がらん」と言ってね。それで僕は落ち着きました。あれシューッて繋がっていたら、こっちもウワーッてなっていたけれども。そんなのが舞鶴の報道合戦。そのときはおそらく、毎日放送はお金があったから、自分でランチを作った。こっちは貧乏だからね、

—— 早川周三（当時、新日本放送の技術）さんご存知ですか。そのときのこと。

—— いろいろあって、うちは電話線をつないで、電話線で報告していました。最初はね。

今村氏 ともかくね、あの時分は、ラジオというと、毎日うちの2つしかないんですよ。まだほかの大阪放送とか出ていなかったからね。だからNHKと3社。それから新聞は産経や日経やら ワーッと10隻ぐらいのランチがね。興安丸にしてみたら危なくてかなわないわけですよ。側へ寄って来るから、ワーッと。それでラッタルって行って、このハシゴを降ろします。なぜかという、検査を乗せないといけない。ワーッと入って来たら、検査官が、パイキ、パイキっていうのは黄色い旗。「これから検査をする。その船は止まれ」という命令ですわ。お役所の命令だから興安丸はスーッとスピードを落とす。ラッタルが止まったらそこへ検査官は移る。そして船が完全にとまるまでの間に検査官がザーッと見ていくんです。顔色が悪い、下痢している人はいないかとか。その降ろしたラッタルの検査官が上がったあとに、新聞記者が飛び乗るんです。横へ行って。まあ危ないですよ、乗り込むんだから。産経新聞の記者は落ちたんです。

—— あら。飛び乗れなくて。

今村氏 もう、ドバツて落ちてドボーン。

—— ラッターにつかまれなくて。あららら。

今村氏 もう危ない、冬やからね。

—— 冬ですねえ。

今村氏 しかも、興安丸のスクリューに巻き込まれたら死にますからね。みんなに助けられた人はまた駆け上がって、もの凄い戦争みたいな状態で。私はあの船に乗ったままでマイクは長一い竿につけてね、竿というのは重いから、前に上にフラー、フラーッてこうなります。それつかまえてくれと言っても、どうしていいか引揚者には分かりません。

—— こう、フラーンッてなっているわけですね。

今村氏 こうつかまえてくださいって。まあ気の利いた人がつかまえて、しゃべる。それで質問は、ランチから、下からやる。興安丸だからデッキまで10メートルぐらいあります。わが社と毎日放送、NHKの3社、ラジオで競争です。テレビがないからね。新聞記者がいくら早くやっても、それを原稿にして送ってプリントして出すわけでしょ。やっぱり速さを競争するといったらラジオ3社。NHKと毎日とが、一番先に情報を出すわけね。もう家族は必死で、待っているから。どこどこから帰ってきた、なんという部隊のなんという人かを知らせないといけないんです。

—— そうするとあのラジオを囲んでいた聴取者の皆さん、家族のみなさんもやっぱり必死になって聞いているわけでしょ。

今村氏 そりゃもう、自分の夫あるいは息子、兄弟が、その中にいるかどうか。それが岸壁の母に繋がっていきますね。わっさわっさやって、ともかく竿の先につけて、喋って、放送して、新聞記者は飛び乗って上がって、カメラはチャーッと取材をしたやつを、我々は生の声を送ります。そして、上陸した人に、また集まってもらって座談会をやって、それをまた生で放送する。民放ができて、2年か3年のことですよ。

—— よくやりましたね。ほんとうですね。



今村氏 よくやりましたよ。2年か3年の新入社員というと、右も左も分からないでしょ。だからやらされたら仕方ないですね。

——— でも後で考えると、随分歴史的な場面に遭遇したんだなという気持ちはおありですか。

今村氏 そのときは分かりません。どうなっているか、わけも分からず、とにかく繋がるか、繋がらないかだけで、こちらはヒヤヒヤしています。でも機械が悪いから。しかも、それが船から、山の上へ。それから2段か3段つないで、堺の送信所でしょ。当時の技術というのは、みなアメリカ製ですわ、頼りない機械でやって、それで、帰って新聞見ると、えらいことになっているわけですよ。もう大きな記事が出ているしね。だけど現場にいたらね、大きい記事か、小さいか分かりやしません。必死になって引揚者つかまえて喋るという、それだけですからね。

——— でも、戦争が終わってこういう方々が帰ってこられたんだなあっていう思いはおありだったでしょうね。

今村氏 ああ、それはもうよく帰ってこられたと。向こうで死んだ人がいっぱいいますからね。とくにソ連というのはシベリアで大勢殺していますからね。だから本当に幸運な人が生き残った。中国はまだあの時分、共産中国じゃないんです。蒋介石の中国。これが大事にして送り返してくれた。「怨みに報ゆるに徳を以てす」(老子)。ええこと言いはって。蒋介石の好きな人、いまの台湾の好きな人は、その言葉を本当にありがたいと思ったんですね。だから、おそらくそのとき共産中国やったら、やっぱりソ連と一緒に殺されていますね。だけど、中国から帰ってきた人は皆、そんなにやつれていなかった。ソ連から帰ってきた人はガリガリだ。食べものを与えられてないからね。それが交互に帰ってくるんです。興安丸があっちの港へ行って中国。こっちの港へ行ってソ連。1000人も2000人も乗っているんでしょうね。

——— 「歌の玉手箱」とか、「舞鶴の報道合戦」とか大きいイベントをお伺いしましたが、その当時の民間放送の、今村さんのようなアナウンサーは普段どんな生活だったんですか。

<1期生のアナウンサーは大阪弁の抜けないフレッシュマンばかり>

今村氏 これはね、人数が少ないんです。せいぜい10何人かな。

—— お入りになったのは男女合わせて 11 人か何かですよ。

今村氏 10 人。女 2 人。男 8 人。全部大阪弁が抜けへん人ばかり。

—— 先生がおられて、先生には。

今村氏 泉田行夫さん。

司会 その当時は語り手と言っていましたね。

今村氏 語り手さん。原清さん（朝日放送開局当時から役員、後に社長）の方針で NHK の人は呼ばないということでした。

—— それでトレーニングをしていく。

今村氏 そうそう。トレーニングしても、すぐものにはなりません。まあ毎日放送はいい人  
とっていたから、すぐものになったけれども。ものになるまでの間は、NHK の方  
が試験放送でニュースを読むんですが、かないません。こちらは大阪弁。アクセ  
ント辞典もらっても、アホらしいと言って、放るような人ばかりです。アクセ  
ントの分かる人は、音楽的な音感のいい人で、分からない人は音程が分からない人。

—— つまり音痴。

今村氏 音痴。揃いも揃って、アナウンサー音痴ばかり。採ったほうが悪いんです。

—— でも、ある基準で採られたわけでしょ。なんか何百何千人と受験したって聞きました  
けれども。

今村氏 10 人採るだけでも、3000 人来た。

—— 3000 人も。

今村氏 。関西大学の天六校舎が試験場で全館いっぱい。全部これ受験生です。3000 人い  
ました。可能性ゼロだから、帰ろうか思ったんですが、折角ここまで来たんだから  
まあ受けようかと。そしたら試験の監督官として、小中高大と一緒にいた友達が  
いたんです。なぜ彼がこんなところにいるのかなと思ったら、大学の教授に言われて

来たそうです。柴田宏くんです。彼は工学部（京大・電気）で、僕は農学部。

——— どんな試験だったんですか。

今村氏 今も一緒。学科、面接、英語。この3つ。

——— ほお。英語があったんですか。

今村氏 英語あった。僕は全部できなかつたけれども、面接が良かった。うん。あのなんで通ったんかなってあとから、試験管の原さんに聞くと、眉目秀丽やつたと。これがイカすでしょ。

——— イカします。

今村氏 ねえ。言ってくれたのはおっさんで。女の子は言ってくれないから。なんでもいいからぶら下がったらいいやって。眉目秀丽で入って、女2人、10人でね。あの時分のラジオは全部、自局制作です。（開局している放送局が少なかったのでもらってくるのがないから、朝から晩まで全部生でやってたわけですよ。そのうちに東京からテープ（に録音した番組）を貰ってくるとか、NTTに頼んで線を引っ張ってこの時間帯はTBSの番組をちょっと入れるとか、少しゆとりができますけどね。最初は全部自分、自分というか、自局でやりましたから。アナウンサーは全部自前で朝から晩まで10人でやりましたね。えらい時代や。自分でも何やっているか分からない。

——— 結構ハードな仕事でしたね、それは。その間に番組があったり中継があったり。

今村氏 もういろいろ。その中で村上っていうね、これ優秀なアナウンサー。相撲はやるね、それから中村鋭一君、後の参議院議員になった人で、野球の放送をやるわけ。だから野球も相撲も（実況放送）出来る人がいたんです。私はなんにもできないけど、「歌の玉手箱」って言っていたら給料くれはってん。気楽なもんですわ。それで何かかんか言っているうちに、5年たって、グリコはその間にローカルの一大阪の駄菓子屋から全国版の企業になった。今や世界のグリコですよ。ポッキーにしたら全国、全世界。その元はというと「玉手箱」ですよ。

——— ラジオ番組「歌の玉手箱」。

今村氏 だから、江崎利一さんという人は、いい番組を見つけた。  
そして、自分の後継者になる息子さんより孫がかわいい。その孫を連れてこの番組見ときなさいよと。これが、我が社が提供している「グリコ歌の玉手箱や」。それが社長になったんです。

——— でもあれですよ、いまスポンサーあるのは普通ですけども、スポンサーが喜ぶ聴視率のいい番組なんて、なかなかスポンサーにとっても当たり外れがあったでしょうね。

今村氏 そう。それは何かというと、スポンサーの実力者。それも代理店任せはだめ。スポンサーの社長あるいは会長が、自分で気に入ってこのアナウンサーで行こう、自分の孫を連れて番組を見に来て、地方の温泉であれ（公開録音）すると言ったら、グリコのその地方の小売店を動員して菓子を会場で配るわけです。だからグリコは朝日放送の番組だとは思っていないんですよ。自分の番組を作って朝日放送に放送させているんだと。それぐらいになると、やっぱりこっちも頑張りますね。

——— そうですねえ。やっておられるうちに今度は、テレビというのが出てきて。

今村氏 出てきた。

——— ラジオを始められたときもおそらく、耳にしておられたのは放送というと、NHKだったでしょうから、NHKの番組を聞きながら育て、ラジオが始まって、民間放送が始まって、それが今度はテレビというのが始まったときにですね、テレビというのは、これはもう本当に未知の世界ですよ。

今村氏 未知。そうそう。だから朝日新聞の偉い人が自分で作っというて、半年ももたない、半年したら潰れるよって。ところが、ずっと今日まで60年間黒字ばかり。

——— 大阪テレビの話になっています、現在。はい。

今村氏 もう赤字なし。民放っていうのは、そういうもんですね。

——— 大阪テレビに行かれたきっかけはどうだったんですか。

<富士山から日本初のテレビ生中継 朝日放送から大阪テレビへ移る>

今村氏 朝日放送はもうやることやった。玉手箱やったし、ほかにも、もしもクイズとか、

いろいろな座談会番組もあった。もうやることないというね。そこへテレビが出てきた。こっちのほうが新しい。それで私が辞めたらグリコも辞めた。だから玉手箱は、私がテレビに移ったときに終わった。

—— 終わったんですか。

今村氏 だからね、ラジオの偉い人は怒っています。自分勝手だと。普通、(大阪テレビへ) 移った人は勤続の年数に入っているんです。朝日放送に 5 年いて、テレビへ行ったら、毎日放送でもそうですが、前の(勤続年数) はつながるんです。しかし私だけつながっていない。ということはクビになったんです。だから、私、退職金というのを、3 ベンぐらいもらっています。

—— うらやましいですね。それは。

今村氏 それもね、ちょっと。

—— 入社の際、眉目秀麗なので選ばれたという話がありましたね。

今村氏 これ冗談でっせ。

—— いえいえ。私はたぶん冗談ではないだろうなと。だからテレビに行かれたのかなと思ひましてですね。

今村氏 いやいや、僕はなぜかという、行ったというよりも放り出されたほう。私のラジオの 5 年間は、良い番組を持って、スポンサーに可愛がられて、東京大阪半々でしょ。しょっちゅう東京出張すると、残った連中は、泊まり、泊まり、明け、休み。泊まり、泊まり、明け、日勤と。そうしないと僕のあなは埋められないでしょ。出張せいというのも、社命ですから。だから居心地がよくなって、早く辞めたかった。

—— テレビへ行かれたらやっぱり居心地よかったですか。

今村氏 新しい会社だから。それでねえ、鈴木剛さんという人が社長で来られた。何故か、毎日新聞、朝日新聞、毎日放送、朝日放送で作った会社ですよ。どちらから社長を出しても具合が悪い。

——— そうですねえ。ええ。

今村氏 朝日新聞から出してもいかんし、毎日新聞から出してもいかんし、どうしようかって。それなら財界から出そうと言って、財界でちょっと文化の分かる人。鈴木さんは関経連かなんかの文化委員長。文化、分かるんですね。絵を描くんです。チャールズ会なんかに入っていて。それから彼は大阪交響楽団の役員もしてきた。鈴木さんのサイン入りの絵を描いた大きなお皿をもらいましたよ。

——— 関西交響楽団。大阪大フィルの前身ですね。

今村氏 そうそう。だから音楽、絵画、お芝居と、いろいろなことが分かる珍しい財界人だったんです。関経連の中でね。しかも住友銀行の頭取でしょ。社長。だからこの人がいいということになって（大阪テレビの社長に就任する）。

——— なんかおもしろい社風でしたね。

今村氏 いやいやそれは、主として毎日放送の社風ですね。

——— これからお話を伺います、富士山中継、生中継っていうのをですね、

今村氏 あれ OTV（大阪テレビ）の頃ですな（1958年7月7日生中継）。

——— はい。このテレビ中継の話というのは何がきっかけで始まったんですか。

今村氏 これには、影武者がいるんです。

——— ほうほう。

今村氏 影武者はどういう人かと言いますとね、あんまり表へ出ない人で、技術の偉人。名前はね、守屋さんという。

——— あの守るという字ですか。

今村氏 ものべのもりや物部守屋、の子孫や。この守屋（篤太郎）さんという人は、陸軍中野学校の出身なんです。

——— ということはスパイ。

今村氏 スパイ。で、戦争中は便衣。便衣っていうのはね、中国人の庶民の服あるでしょ、あの長いやつ。

——— 長—いやつ。

今村氏 ほんで上手やねん。敵の裏へ入って、身分は将校ですよ。日本の陸軍の。ほんで情報を向こうの裏からシナ軍の、当時の中国軍の

——— 中国軍の。

今村氏 こっちへ知らせる。スパイ。

司会 ということは中国語ペラペラで。

今村氏 もちろん。向こうの習慣身につけて、朝日放送へ来ても、ひょうひょうとしているんですが。  
最後見つかるんですね。なぜ見つかったかということ、顔をこうして洗ったんです。

——— あれ、スパイがばれちゃったわけ。

今村氏 日本人はこんなふうに顔を洗います。しかし、中国の人は手を固定して顔を動かして洗う。

——— 顔を動かす。

今村氏 それを向こうのスパイが見て、あっ、こいつは日本人だっていうのが分かった。分かったら殺されるので、サッと逃げ帰ってきてこっちへ入った。そういう人です。

——— そういう人が大阪テレビにおられた。その守屋さんが富士山中継を言い出した。

今村氏 これは、ソフトよりハードのほうが難しい。山のとっぺんへ中継機械を持っていかないといけない。山のとっぺんから生中継だから。あの時分の何トンというカメラを持って上がらないと。ケーブルもずっと下まで引っ張らないと。それから飛ばした電波は何段かの中継で持ってこない。全部技術の問題だからソフトのほうで、

いくらプランを立てて、これ面白いよって言ってもね。

—— 中継のシステムが出来ないとね。

今村氏 そうそう。先にそれを自分でやった。電電公社へいくと、電電公社は、守屋さんが言うのなら協力しましょうって、線だとか、あれこれ全部協力してくれた。それでこれならできるということになって、富士山へ行きまひょかって言ったんです。原田さんが面白いなど。だけど、あそこはTBSの縄張りだと。そうですわな。富士山というのは大阪の放送圏とちがいますもん。

—— そうですね。

今村氏 大阪の放送圏はせいぜい三重県のこっちでしょ。これはやっぱりねえ、仁義切らんとあかんねえ。というのもあったけれど原田さんはやろうと。そしたらTBSが怒った。人のサービスエリアに土足で入ってくるとはなんてことだって。それなら、お宅がやるかって言うと、守屋さんみたいな人がいないから出来ない。プランだけ立てても、向こうもさすがにあれは出来ないと。それでハード面の準備が出来てからプランを出したから。もうこれはカブトを脱ぐわということで始まった。だからね、守屋さんも最後まで頑張りましたよ。頂上で一週間泊まりこんだんですよ。僕ら。空気に慣れないとだめだから。

—— そうですね。

今村氏 そうするとね、技術の若い子も皆泊まり込んだ。どこへ泊まりこんだかという、頂上の外輪山の中に厚生省の寮があって、役人のいわゆる寒冷地とか低酸素地域の訓練場所なんです。技術の人と我々とプロデューサーとか10何人か泊めてもらった。守屋さんが寝袋を調達してくれたが、寝ると臭い。これ臭いでって言うと、文句言うなって。なぜ臭いのか。朝鮮戦争で戦死した米兵の死体をそれにいれて本国へ持って帰った。本国へ持って帰ったらもう要らんでしょ、それを日本政府がもらった。

—— あらー。

今村氏 でそれを、また守屋さんがもらってきて、僕ら皆それに入って寝た。だけど死体のおいが残っていますからね、臭いんです。それが富士山中継の裏にあった。表はきれいですよ。富士山がバアーと映って。裏臭い。



—— 機材をどうやって持って上げたのか。

今村氏 みんな強力。

—— 強力さんですか。

今村氏 富士山の強力は全部決まった人がやっている。何人かおりますわ。全部借り上げた。その間ほかの仕事はできない。

—— 何人ぐらい。

今村氏 15、6人かな。カメラ1つでも1人や。こんなごっつい（当時は親指サイズの超小型カメラはなかった）。

—— 大きいですよ。

今村氏 ワイヤー、こんなロープをバツとまとめて重たい。それを強力さんは平気。パツとかついでシュシュシュ。その代わり、キャッシュの支払い。

—— 強力さんには。

今村氏 はい。明日払いますとかね、小切手とかは駄目。

—— まとめていくらかじゃない。

今村氏 その場で持って上がったら山上で払う。それが半端なお金じゃないんです。もの凄いお金。しかも人数多いでしょ。

司会 危険手当みたいなもんですね。

今村氏 そうそう。そんなの担いで転がったらもう死にますからね。誰も死ななかつたけどもね。それで上で払わないといけないので。その時分、1万円札がまだないんです。千円札まで。千円札でね、何十万払ういうと、ごっつい量です。

—— それの係だったんですか。

今村氏 僕はしゃべるほうで。係は経理の人。その人あとから経理担当の常務になりましたけど。これもちょっと変わった人でね、

—— 経理担当の人が払うためにわざわざ行っておられた。

今村氏 そんなもん、ほかの人だったら、お札を腹いっぱい巻いて上がれって言われたって、嫌やって言いますが。彼はよっしゃ、やりますって。経理担当だからね。まだ入社早々で若い。それをね、腹に巻いて臨月ぐらいの腹だ。ここまで運んできた。はい10万円。ここまで運んできた。はい20万円って払うわけ。

—— こうやって千円札数えて。

今村氏 そうそう。それはね、僕ら出来ませんから、彼がやってくれた。裏で守屋さんが技術のことを押さえ、電電公社と交渉し、气象台と交渉し、そして経理の人はお札を腹に巻いて、強力を全部雇って、持って上がった。3トンか4トンあった。

—— 経理の人って山本さんですか。ひよっとすると。

今村氏 ちゃうちゃう。誰だったかな。あとから経理の常務になった人。

—— コサカさん。

今村氏 ちがう。名前ふっと忘れた。

—— 山田ですか。

今村氏 ああ、山田。新入社員。だけどね、やります、というて腹に巻いて上がりました。

—— 面白いことがあったんですね。

今村氏 それがやっぱりね見込まれて、最後は経理担当の常務(山田定信氏?)。やっぱり、梅檀は双葉より芳し。この人も芳しい。

—— その意気があったわけですな。

今村氏 皆、感心した。自分1人上がるのもしんどい。こんな腹して上がるの、しんどいでしょ。それが、上がったんですわ。

—— 一週間寝泊まりして、薄い空気には慣れましたか。

今村氏 あー、慣れない、慣れない。皆、弱い人は高山病。一番高山病にかかってきついのは、佐伯（勇）さんという偉い人。隊長さん。海軍のこれは参謀将校。それがね真っ先に倒れました。隊長戦死や。はは。

—— 今村さんはどうだったんですか。

今村氏 僕は平気だ。だから、根性悪の人は元気だった。

—— 非常に分かりやすい話ですね、さて中継の日になりました。記録を拝見しましたが、7月の7日っていう非常に覚えやすい日におやりになったんですね。どんな中継だったんですか。

今村氏 あの頃はVTRがないんです。オール生。(頂上から中継する)日にちも決まっていますので新聞広告してある。僕ら一週間前から上にいるでしょ、でその日になった。雨になっても嵐になっても文句なし。朝パツと起きたら、富士山の強力さんが、こんな富士山のええ天気は、わしは長いこと強力しているけどいっぺんもないって言ったんですよ。やっぱりね、守屋さんというのはついている人。後ろに何かついている人。便衣が見つかって殺されるところを、ちゃんと生きて帰ってきた人だから。

—— なるほど。

今村氏 一番いい日にあたって、朝からずっと僕は生でやって、富士山のとっぺんへ上がるとね、天気が良かったら、影富士が見えるんです。影富士というのは、富士山の東から日が昇ると、山梨県側に富士山の格好の影が同じ形で出来ます。3000メートルの。それを見た人は長生きするということです。

—— 大丈夫ですねえ。

今村氏 滅多にないものが見られた。それで放送が始まったら、まあ快調に行っただけ。



菩薩の峰を一回りずーっと映して、チョン。時間がきたら終わり。

—— 何時間ぐらいの中継だったんですか？

今村氏 1時間ぐらい違うかなあ。始めたとたんに黒雲が湧いてきた。ブアーッと。

—— それはエンディングの時ですか。

今村氏 そう。それまでは天気はピカピカに良かったんですよ。この峰からいこかーって言って、技術の人が撮り始めた。その後ろから黒雲が追っかけてきた。技術の人は大変ですわ。彼らはね。そしたら技術の人もとんちを働かせて、雲と競争するわと言って。雲がこう来たらこっちへ行く。こうきたらこう。雲が画面の半分でこっち半分が晴れている、7つの峰というのを一回りびゅーっとしたら雲が全部覆っててっぺんは見えなくなった。それ時間一緒なんです。そこはまあ霊峰ですからね、助けてくれた。そんなもんね人間の技じゃないですよ。台本に書いてあっても、そこで雲が現れるってそんなもん現れませんよ。

司会 それはそうですね。

今村氏 この人（守屋さん）は役員になるんです。役員になったけど。原さんの言うことききません。怒られて、1年目にクビになった。

—— 話はまだまだ果てしなくてですね、その後、（大阪テレビから）ABCにまたお帰りになっていろいろなお仕事をされるんですが。

今村氏 帰ったんじゃないくてね、行くところがないんです。毎日放送へ行くといっても入れてもらえない。朝日放送は入れてくれるかなと思ったら、今度は原清さんも一緒に帰ったわけなんです。

—— ああ、なるほどなるほど。

今村氏 一緒になって帰って、それからずっとうまいことって、最後は原さんはパリで客死です。それで僕の寿命も終わった。

—— その後、日仏協会をおやりになっているときに、私がお目にかかったという。

今村氏 そうそう。あの頃は絶頂。

—— ぐるっと、話が一回りしたところですね、残念ながらその後の話をまた機会があればという気がしますけど。ところで今はですね、さっきちょっとニュースを、夜中でもテレビを見ているというお話を伺ったんですが、よくテレビはご覧ですか。

<中国の古典・四書五経をフランス語で 今でも毎日 8 時間の勉強>

今村氏 あのね、テレビはニュースしか見ない。ドラマみてもええんだけどね、時間がないんですよ。というのは 1 日 24 時間でしょ。まあ 8 時間か、7 時間かは寝ている。あとの 8 時間は、お風呂に入ったりご飯食べたり、ちょっと用事に行ったりする。勉強する時間は 8 時間しかないんです。8 時間、8 時間、8 時間。勉強する時間を、人はいろいろなこと、パソコンやったり、聞いたり。僕はその 8 時間を何に使っているかという、もう残り少ないけれども、中国の四書五経っていうのがあるんですよ。大学、中庸、論語、孟子。それから、書経、詩経、礼記、春秋、それから易経もある。その 5 つの中国の、それ以外には孟子もあるし、そのフランス語版、中国語版はちゃんと訳した本がいっぱい出ていますけど、フランス人は中国研究が非常に進んでます。日本よりももっと歴史が長い。中国語の四書五経、もちろん日本語の訳本がある。フランスの完璧な訳本があるんですが、そのへんの本屋には売ってません。アリアンス・フランセーズっていうフランスの学校がある。そこに言うと、アリアンス・フランセーズは教科書は全部フランス語。フランスから輸入します。フランスで作った。その本屋と繋がっています。その人にその本屋に聞いてくれって。やっぱりその本屋には四書五経のフランス語版が全部揃ってます。そのアリアンス・フランセーズが大学、中庸、論語、これこれこれって言って、言った本を全部輸入してくれた。値段はユーロでついています。フランス・フランはもうないから。それを何から、まあ論語から始めて、それから次に老子に入って、それから易経をやって、今、韓非子やっています。大学時代よりもよっぽど勉強しています。大学ノートにずっと自分で。そのかわり 1 日 1 ページ進むかなんかで 2 年前から始めて、まもなく韓非子は終わります。20 ページぐらい。それが 1 日の勉強する時間の多くを占めます。残念ながら時間がないんです。

—— テレビを見る、ドラマを見ている時間がない。

今村氏 その代り、なんのニュースを見るかという、主に見るのが NHK の 7 時と 9 時の分。それが面白くないなと思ったときには、BS のニュース。これは毎時 50 分から見えています。

—— ええ、ありますねえ。

今村氏 これはよう見ます。だからこの3つ。BSニュースと（地上波の）7時と9時。我が社の番組というのは、僕は在職中から聞いたことも、見たこともない。ラジオもテレビも。あと残った時間は何しているかという、ニュースを見るか、フランスの原本を訳しているかで、ほかのことをする時間がない。もうあと寝るだけです。だから8時間のうちの残った8時間のうちの半分、3分の1ぐらいはラジオとテレビのニュース。ほかにラジオの番組でね、僕が好きな番組が2つあります。毎日放送。毎日放送で僕がいつも聞いているのが、浜村淳さん。ラジオね。朝の8時。だから朝はなるべく8時に起きて、浜村淳の話を9時から10時ぐらいまで聞きますね。これはね、芸能ニュースとかにあんまり縁がない僕にとって、よい勉強になりますもん。誰と誰がくっついたとかね。誰と誰とが離れたとかね。このスターは会見のときにニヤリと笑ったとか。しょうもないことよう知っている。あの人。面白い、この話がね。上手やから。

—— 「ありがとう浜村淳です」。

今村氏 そうそう。あれは是非おすすめ。

—— 分かりました。

今村氏 ところがね、8時から始まって9時過ぎぐらいから、もうそんな長いこと聞いてられないから、ちょっと勉強して。それで昼から、これも毎日放送。「こんちはコンちゃん」。なんとかいうのがありますね。12時半から。

—— 近藤アナウンサーのあれですね。

今村氏 そうそう。この人、時々抜けているんです。大事なデータとか、人の名前とか間違えるんですが、それがまた、かわいいねん。それがウエーッと間違ったこと言って、しばらくしてから訂正が入ります。まあデスクが聞いているから。まあこんな偉い人が聞いているから。何言うもんねんって言って。すぐ謝ります。その謝り方がね、可愛い。だからこだわらへんねん。

—— そっちのほうが正しいですね、きっと。

今村氏 そうそう。これも全部聞きます。だから一番面白いのは、自分がニュースの中で面

白いと思ったこと3つやりますね。それがね12時半から始まって、まあグダグダグダやって、1時半ぐらいから2時ちょっと過ぎまで、その時間がコンちゃんのなんでも言うぞっていう時間ですね。その3つのテーマはね、だいたい大事なところを押さえています。

—— ラジオはそうやってお聞きになりますけれども、最近お年寄り、やっぱりラジオを聞いているんでしょうか、テレビはあまり見なくなっているんですね。

今村氏 それね、眼はしんどいわ。私の場合、あんまり眼は衰えないから平気だけどね、眼の悪い人はテレビしんどいね。

—— 眼が弱っていて、しんどいからテレビを見ないんでしょうかねえ。面白いものがないからじゃないんですか。

今村氏 いやいや、眼がしんどいんでしょうね。いろいろありますよ、番組ね。だから、昨日深夜でやってた維新の会のおっさんがね、NHKに面白いものは一つもないって言っていましたがね、まあまあ一生懸命やっているところもありますわ。僕がNHKをなんで褒めるかっていうと、私の次男坊、NHKに入っているんですわ。NHKの悪口を言うのは、息子に悪いから。褒めますねん。

—— なるほどねえ。

今村氏 だけど、あんまり聞いていません。毎日放送のラジオはよく聞いてますが。

—— それから、この前お話を伺ったときにね、高齢者は事実とか、あるいは事実に基づいたもの、例えばニュースとかそういうもののほうが好きなんじゃないかと。自分なりに判断できる番組を高齢者は見たいんじゃないかっていうお話を伺ったんですけど。

今村氏 うーん。これはねドラマにしても何にしてもね、作りもんですわ。作りもんってことは人の頭で考えて作るでしょ。年取ってきたら大体ね何もかも経験済みやね。だからだれがどない面白いもん作ったって、ああそんな話か。もうチョンバレや。だから面白くない。だけどニュースはね想像外のことが起こるわけですよ。年寄りの常識にないことが起こるでしょ。それがニュースの面白いところ。だからそういうものは興味があるけれども、まあ大体、筋書きが分かって作り上げるドラマとかね、これはまあ芝居。



だけどね、こないだ久しぶりに何年ぶりかに見たけれどね、オーストリアの将校が家庭教師の女の人をお嫁さんにして 10 人ぐらいいる子供と一緒に、あれは何という番組。

—— 「サウンド・オブ・ミュージック」ですね。

今村氏 。前にも見たんだけど、また見たんです。こういうものはテレビで作れない。やっぱりね、作った人は素晴らしい人ですけどね。アンドリュース。

司会 ジュリー・アンドリュース。

今村氏 そうそう。あの人も上手やけど、面白いね。だから 3 時間ぐらいかかるのかな。これは、その辺のちょっとしたラジオ、テレビドラマなんか太刀打ちできませんわ。若かったら分かりますよ。凄いやけどね。よう何べんも見てるから、もう結末も何もみんな分かってますねんで。だけどもね、やっぱり見だしたら、最後まで見て、ほんでスイスの国境へ、あのへんも行ったことあるけれども、スイスの国境をこうずっと越えて、中立国へ逃げるんです。やっぱりほっとしますやん、見ていたら。そうするとナチっていうのはやっぱりオーストリアまで害を及ぼしとるんかなと思うてしまう。ところがね、僕は、第一外国語はドイツ語なんです。医者になるつもりだったから。だからねアンビバレントっていうか、ドイツは好きやし、嫌いやし、ナチは嫌いやけども、ユダヤ人はあんまり好きやないし、そのへんが難しいところ。

—— いやいや、まだ。多分、今日ご参加の中の方で、何かこう聞いてみたいなあ質問してみたいなあということが、このお話の中で出てきたんじゃないかと思いたすので、その辺りで皆さん方にマイクを渡したいなと思っております。ここに来られるまでは、ちょっと、おみ足がゆっくり、ゆっくりになりました。でも身体は元気。もう元気印そのもの。それから、お口の方、頭の回転とお口の回転は今をもって衰えを知らずという。えっとおいくつでしたっけ。80。

今村氏 昭和 2 年生まれ。みなさんと一緒や。86 か 7 かなんか。米寿ですわ。2 年やったらなんぼかな。今年の 7 月がきたら、満 87。

—— 87 歳。いまだに車を運転していらっしゃいます。

今村氏 これはね近所のスーパーへ行くだけでっせ。遠距離は怖くて。

—— 今日はですね大熱演を 2 時間、もう 2 時間強になりますけれども、お話頂きました。

司会 同い年でご質問ないですか。何か。この前お話伺ったからだいぶ分かっているんですね。弥生会館の時に。

今村氏 あれもね高橋晋三基金。だからねえ毎日放送というのは、ええことようしてはるわ。

—— いや、うちもないですねえ。関テレ（関西テレビ）も。

今村氏 凄いな。あれはね私財ですよ。自分の財産を寄付しはった。お金はね、なんぼあっても邪魔になりませんよ。やっぱり創業者の人柄が残るんですね。

司会 うまくまとまったところでお開きとさせていただきます。  
これからもますますお元気で。

今村氏 どうも。ありがとうございました。

以上